

第2 教育研究団体の意見・評価

① 日本地理教育学会

(代表者 田部 俊充 会員数 約500人)

T E L 042-329-7729

1 前文

令和8年度大学入学者選抜に係る大学入学共通テスト問題作成方針では、「高等学校学習指導要領において『主体的・対話的で深い学び』を通して育成することとされている、深い理解を伴った知識の質を問う問題や、知識・技能を活用し思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる問題を重視する」とある。さらに、「それらを適切に評価できるようにし、問題の構成や場面設定等を工夫する。例えば、社会や日常の中から課題を発見し解決方法を構想する場面、資料やデータ等を基に考察する場面、考察したことを整理して表現しようとする場面などを設定することによって、探究的に学んだり協働的に課題に取り組んだりする過程を、問題作成に効果的に取り入れる。」とされている。また、特に地理に関しては「地理的な見方・考え方を働かせて、地理に関わる事象の意味や意義、特色や相互の関連を、概念などを活用して多面的・多角的に考察したり、地理的な課題の解決に向けて構想したりする力を求める」とされており、「地域を様々なスケールから捉える問題や、地理的な諸事象に対して知識を基に推論したり、資料を基に検証したりする問題」を出題するとされている。これらの方針は、現在の学校現場で行われている地理の学びの方向性と一致するものである。以下では、これらの観点を基に、受験者の日ごろの学習成果が適切に評価できる問題であるかの視点で講評していきたい。なお、本年度の問題総数は16問で、昨年度と同様に4大問構成であり、学習指導要領の「B 国際理解と国際協力」の(1)生活文化の多様性と国際理解、(2)地球的課題と国際協力、「C 持続可能な地域づくりと私たち」の(1)自然環境と防災、(2)生活圏の調査と地域の展望から満遍なく出題されており、問題の分量は適切で基礎的な問題が多い。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価

第1問 (「地理総合、地理探究」と共通のため省略。)

第2問 (「地理総合、地理探究」と共通のため省略。)

第3問 日本の自然環境と防災に関する小問で、衛星写真や陰影起伏図など様々な資料を複合的に使って判断させる問題も含まれており、正確に読み取ることができれば確実に正解できる問題がほとんどである。日常的な学習において、いかに多様な資料から必要な情報を読み取る機会を持っているかによって、感じる難易は変わってくるだろう。

問1 日本列島における太平洋側、日本海側、瀬戸内に河口部を持つ河川流量の季節変化に関する小問である。河川流量は気候との関係を考えればよく、過去にも出題がされた典型的な出題であるため正答は選びやすい。流量の多い時期に着目すれば正答を導くことができただろう。

問2 地形と土地利用について衛星写真から読み取る小問である。海岸地形と河川地形が両方見られる場所であるため、選択肢前半の地形の成因を注意深く読むことが必要である。その地形がどのように人々の暮らしと関係があるのか、関連させて学習していきたい。

問3 外洋に面している南西諸島とそうでない瀬戸内海を比較して、津波の被害に遭いやすいか否か、防災行動との関係を問う小問である。典型的な河川地形の災害リスクではなく、島

島の災害リスクについて出題されたことで、受験者に地域に応じた個別の地形理解や災害リスクや防災行動について考えさせることが日常的に必要であると示唆しているように思われる。

問4 複数の資料を関連させて避難行動について考えさせる小問である。図や文章を複合させた問題は従来通りの出題であり、地理での防災学習に求められる必須の能力を図っているといえる。避難場所のリスクについても考えさせることで、受験者自身の防災意識をより具体的に深めることができる出題であろう。

第4問 地球的課題に関する大問である。受験者が解答する上での難しさはなく、総じて難易度は標準的であると考えられる。ただし、学習指導要領や教科書を準拠とした出題の在り方として改善を求めたい。

問1 4地点でみられる環境問題の正誤に関する小問である。アラル海周辺は中緯度地域に位置しており、コーヒー豆の栽培に不向きであることが分かれば容易に解答できる。解答に対して農業の知識、あるいはアラル海周辺の綿花栽培に関する知識を求めているため、環境問題の本質が捉えられるような誤文の作成が望ましい。

問2 世界の地域別の穀物需給から食料問題を考えさせる小問である。アジアの人口規模、発展途上国の穀物供給の様子が理解できていれば解答可能である。図は割合のみで示されているが、生産量と消費量は常に均衡がとれているとは限らず、それぞれの世界計を示す必要があったのではないだろうか。

問3 アフリカにおける三つの指標を判断し、組み合わせる小問である。原油産出量と1人当たりGNIの判断は、ナイジェリアや南アフリカ共和国で可能であるが、「地理総合」の出題としては求められる知識が細かい。また、グローバルなスケールや他地域との比較に基づいた設問の設計になっておらず、アフリカの静態地誌に基づいた設問とみなすこともできる。今後の出題検討の際に、「地理総合」の出題範囲として適切かどうかの綿密な議論をお願いしたい。

問4 少数言語の保護や振興を目的とした取組に関する小問である。ニュージーランドの多文化主義を踏まえれば容易に解答できる。いくつかの選択肢には地理的な見方・考え方が反映されていないものがあるため、四つの選択肢を、正答のように「場所」に基づいたものに揃えるなどの工夫があってもよい。

3 総評・まとめ

本年度は全体的に標準的な難易度の問題が多く、受験者も解答しやすく、日ごろの学習成果を発揮しやすかったのではないかと考える。各設問においては、受験者は初見であろう図や表などの資料が豊富に用いられており、地理的な見方・考え方を働かせながら解答するものも多く見られた。また、GISで作成された図を基に考察をしたり、地形図や陰影起伏図など複数の図表を重ね合わせて考察したりする問題も見られ、地理的技能も適切に問われているといえる。一方で、思考力・判断力・表現力等を問う問題に関しては、資料を基に「なぜそうなるのか」について考察したり、課題の発見や解決策の構想をしたりする問題は見られなかった。また、学習の過程を意識した出題に関しては、資料やデータを基に考察する場面は見られたものの、社会や日常の中から課題を発見し解決方法を構想する場面や考察したことを整理して表現しようとする場面設定は見られなかった。全体的な印象として、地理的な知識を問われている問題が多い印象を受けた。また、地球的課題と国際協力の大問において、地誌の視点から出題されている問題が見られたことが課題として挙げられる。

4 今後の共通テストへの要望

共通テストの出題内容や出題方法が教育現場に与える影響は非常に大きい。共通テストにおいて、何がどのように出題されるかで授業のあり方が変わる一面も持ち合わせている。「地理総合」の理念がより正しく教育現場に反映されるように、学習指導要領に示されている事項に基づいて以下の三点を要望したい。まず一点目が知識・技能、思考力・判断力・表現力等を問う問題を引き続き出題することである。受験者の負担にならない程度に、初見の資料をもとに地理的事象に関して考察をしたり、なぜ地理的事象が発生するのか、他の地域とはどのような違いがみられるのかなど、地理的な見方・考え方をもとに思考力を働かせて解答したりする問題を引き続き出題して欲しい。また、複数の地図から地域の特徴を読み取るなど地理的技能も引き続き出題して欲しい。二点目に、学習過程を意識した出題をしていただきたい。設問レベルにおいては、生徒が問いを立てて、資料を基に考察をするなど探究的な学習場面を想定して出題したり、解決策の構想まで出題したりして欲しい。また、大問レベルにおいては、大問全体を通して「課題の発見→資料をもとに要因の考察→解決策の構想」など一連の学習を意識して出題するなどの工夫が欲しい。三点目には、学習指導要領に示された「地理総合」の理念を的確に反映させることである。「地球的課題と国際協力」の大問において、地誌的な視点からの出題が見られた。今一度、どのような意図で何を問いたいのか、出題が地理総合の範囲として適切であるか、学習指導要領を基に検討していただきたい。

上述したことを踏まえ、しっかりと学習に取り組んだ受験者の成果が最大限に発揮されるような「良問」の作成を今後も期待したい。

② 全国地理教育研究会

(代表者 小林 正人 会員数 約300人)

T E L 0422-46-4181

1 前文

全ての小問において図や表、資料などが少なくとも一つは提示され、設問文だけのものはなかった。本試験と比較して、大問構成や小問数にも違いはなかった。例年、追・再試験の方が難易度が高いように感じられることが多かったが、『地理総合、地理探究』と同様に、今年度については追・再試験の方が平均点が高かったのではないかとと思われる。例年以上に、受験者は手ごたえを感じたのではないかと。

この要因として、これも『地理総合、地理探究』と同様に、提示された資料や問い方が旧課程のセンター試験時代を彷彿とさせるものが多かったからではないかと考える。かなり遡って過去問を解いてきた受験者にとっては安心材料となったかもしれない。とはいえ、詳細は以下に述べるが、新課程の「地理総合」らしさを感じられた小問も含まれており、そうした問いに全体の印象が近づいていくことを望む。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価

『地理総合、地理探究』との共通問題は、『地理総合、地理探究』の方に記載。

『地理総合、地理探究』との共通問題の出題内容の変更を受けて、本試験と同様に第4問の「生活文化」が「地球的課題」となる変更があった。大問ごとの小問数の変化は、これも本試験と同様に見られなかった。

本試験でも述べたが、『地理総合、地理探究』での出題でも成立するような、「地理総合」にしては詳細な知識を背景とする問いや、それなりの授業時間数を割かなければ扱えない内容を含んだ問いが含まれた印象である。その中で、本試験に比べると追・再試験の方が難易度が抑えられたように思うが、複雑な問い方が少ないこと、また明らかなヒントが示された問いが見られたことがその要因と思われる。問い方やヒントで難易度が調整されるのではなく、「地理総合」を学習してきた受験者が一筋縄ではいかないと感じながらも、思考・判断を経てきちんと解答できるような作問を願う。

第3問 「日本の自然環境と防災」 大問のタイトルは本試験と同様だった。小問三つが、地図を読み取って思考・判断する問いで、比較的難易度が高かった。ただし、地図を読み取って思考・判断させる作問方針は歓迎したい。一方で、『地理総合、地理探究』との共通問題として出題された第1問、第2問よりも、「地理総合」単独で出題された第3問の方が難易度が高く感じられ、この点も本試験と同様であった。この大問中の小問はどれも『地理総合、地理探究』での出題でも成立するものであり、「地理総合」と『地理総合、地理探究』との違いがどこに置かれているのかが明白ではない点についても、本試験と同様と思われた。

問1 河川流量の月別変化に関する組合せ6択問題。北海道の日本海側、瀬戸内海に面した地域、太平洋側という、日本の気候について問う際の定番と言える3地域からの出題で、難易度は低い。

問2 写真で示された地域の土地利用に関する問。四つの肢文どれかが、四つの囲まれた地域何れかで見られる小地形を説明しているとあるが、上空から見た写真での土地利用

の判断は難しい。対象となった小地形についても内容は詳細で、「地理総合」よりは『地理総合、地理探究』での出題が相応しかったのではない。ただし、正解となる肢文④に「波の作用で」とあることから、海岸に一番近いFを選択すれば正解でき、難問とはならなかった。こうした点を含めても、改善の余地がある問いとしたい。

問3 二つの島のハザードマップをもとに、二つの凡例が津波浸水と土砂災害何れであるかと判断した上で、橋梁で他地域とつながっていないことによる潜在的なリスクを考えさせる問い。谷が塗りつぶされたような凡例が土砂災害、島の外周が塗りつぶされたような凡例が津波浸水と判断できたか。難易度は高いが、地形と災害の関係を地図を用いて考えさせた点は評価できる。また、潜在的なリスクについても重要な点を問うており、評価は高い。

問4 ある地点周辺の陰影起伏図や浸水想定区域を示した地図を見ながら、避難場所への経路とその説明としてふさわしいものを答える組合せ6択問題。地図と経路の説明を丁寧に照らし合わせれば正解可能。解答に時間を要するものの、提示された地図は読み取りやすく、説明も判断の鍵となることがきちんと書かれており、好感が持てる。

第4問 「地球的課題」 本試験のタイトルは「現代社会における地球的課題と国際協力」であったが、追・再試験ではタイトルが「地球的課題」となり、国際協力に関する内容が除かれた。本試験と同様に、小問四つのうち二つで地図が用いられた。公民科目ではなく地理の問いであり、今後も地球的課題の分野で積極的に地図が用いられることを期待したい。本試験の第4問よりも難易度は低いと思われる。「地理総合」全体として、本大問程度の難易度での作成を望みたい。

問1 四つの地点で見られる環境問題に関する下線部の正誤判断問題。アラル海周辺が正答となったが、その他の地点も教科書で扱われているものであり、正解は容易。

問2 世界に占める各地域の穀物の生産と消費が問われた。資料が精選され、問い方も難解でないが、この大問中では難易度が高かった小問と思われる。人口の多いアジアが生産も消費も最も割合が高く、明かされているヨーロッパや北アメリカの、世界に占める割合が高い方が生産と考えられたか。この図から、世界にはどのような食料問題が生じると考えられるかという導入が行えそうで、参考になる。

問3 アフリカの経済や資源に関する主題図とそのタイトルに関する組合せ6択問題で、難易度はやや高い。北アフリカ諸国と南アフリカ共和国についての経済状況や、アフリカにおける産油国を理解していれば正答を得られるが、内容的には『地理総合、地理探究』で相応しいのではない。「地理総合」であれば、アフリカでの貧富の地域差を問うよりは、アフリカでの貧困が継続している地理的要因を問うなどの方向性もあったのではない。

問4 少数言語に対する取組についての「地理総合」らしい問いで、難易度も低い。ニュージーランドのマオリ語を知識として問うのではなく、少数言語の保護や振興にデザインや国際的言語の利用が相応しくないことを判断させる内容となっており、良問としたい。

3 総評・まとめ・要望

本試験でも、そしてこれまでも繰り返し述べてきたが、『地理総合、地理探究』での出題でも成立するような、「地理総合」にしては詳細な知識を背景とする問いや、それなりの授業時間数を割かなければ扱えない内容を含んだ問いが含まれた。「地理総合」で学習され、よって出題対象としてふさわしい内容について、改めて再考を願う。一方で、二つの島のハザード

マップから災害の種類を判断させた上で、離島の潜在的なリスクを考えさせた問いや、避難場所への経路とその説明としてふさわしいものを答える問い、少数言語に対する取組についての問いなどの「地理総合」らしい良問も見られた。どういった点が「地理総合」らしいかの要素を抜き出すと、基礎的な知識や地理的技能をもとに、具体的な資料を通じて周辺環境の情報がきちんと読み取れ、正答を探すこと自体が丁寧に、かつ段階的に思考・判断する過程そのものになっていた点であると考え。こうした資料や作りの問いを通じて、今後も地球上の様々な事象に対して、地理的見方・考え方を養い、事象の意味や将来像を構想させるような「地理総合」の手本となる作問を願っている。